

目で見る

日本と西洋の歯に関する歴史

—江戸と明治期, 16~20世紀の資料を中心に—

An Illustrated History of Tooth in Japan and the West

—Focussing on the Edo and the Meiji Periods, the 16th~20th Centuries—

第二版

大野肅英 羽坂勇司

立庵亭
國貞画

わかば出版

Part I

日本の歯に関する 風俗と歯の治療

Tooth-related Customs and
Dental Treatment in Japan

—江戸と明治期の資料を中心に—

—Focussing on the Edo and the Meiji Periods—



図2-20 『江戸名所図会』 伍重軒露月編
1733 (享保18) 年
浅草寺の境内には美人を置いた楊枝店が多くあった

『風俗画報』1897 (明治30) 年1月25日には、「仁王門より本堂に至る間、隨身門より本堂に至る間、及び本堂の周辺に数多くの楊枝店あり……明治初年の頃より衰へ行きて今は一戸の之を商う者なし」とある



図2-21 「東都名所盡 楊枝店の美女」
英泉画 江戸期 35×23cm



図2-23 「浮世四十八手」 英泉画
江戸期 37.5×25cm
夜をふかして朝寝の手
右手に房楊枝を持ち、左手に歯みがきの袋を持つ美女



図2-24 「今様美人合」 貞斎画
浮世の景絵 江戸期 35×24cm
歯みがきをする傾城の美女



図2-22 「絵本時世粧」 歌川豊国画
復刻本 1802 (享保2) 年
楊枝店のやなぎやは、奥山銀杏樹の下なる楊枝店、柳屋のおふじという者もっとも美女の聞之ありて、春信の錦絵に多く書ける由とある



図2-25 『柳川書帖』
江戸期
かなだらいを前に歯をみがく江戸時代の男性



図2-26 「題不明」 国貞画
江戸期 37.5×25.5cm
かなだらいを前に、左手に手鏡を持ち、立って房楊枝で歯をみがく美女

E GUÉRISSEZ PAS, ARRACHEZ !

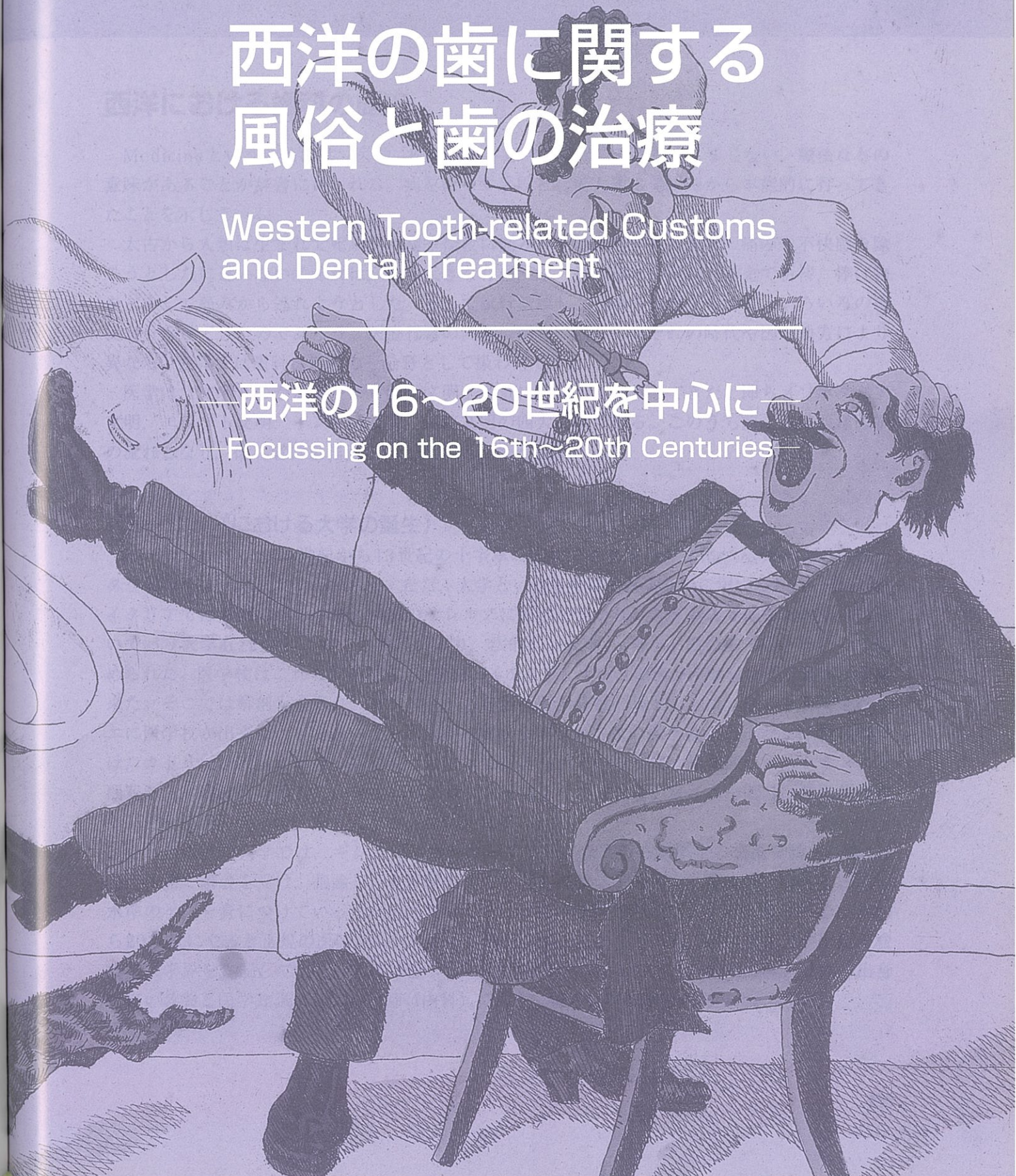
Part II

西洋の歯に関する 風俗と歯の治療

Western Tooth-related Customs
and Dental Treatment

—西洋の16～20世紀を中心に—

—Focussing on the 16th～20th Centuries—



「街の歯抜き屋」



図12-68 「街の歯抜き屋」
1830年ころBowles & Carverが刷って販売した。
鍛冶屋の歯抜き屋を描いている フランス



図12-69 「原画の絵ハガキ」
プラハ国際ギャラリーの絵葉書テオドル・ロンバウ「にせ医者」
より引用

歯抜き屋

この絵の原画はTheodoro Rombouts (1597～1637年) によるものでスペイン・プラハ美術館にある。版画はアンドリエス・パウリ (1600～1639年) が版画化し、その後マニエル・S・カルモナが版画化した 銅版エッチング 33×41cm
版画の下に添えられている「31の詩節からなる4行定型詩」は次のように述べている

歯抜き屋

人に痛みは数々あれど、歯痛はまことに日常茶飯、この痛み止めて見せると豪語はすれど、ことは既に業（わざ）の域、いかなる企ても甲斐なし、空し
手っ取り早い道とはえば、歯抜き屋のもとへ駆けるに如かず。「痛くはないぞ」とは歯抜き屋の前口上、まさにそれ、抜歯鉗子挿入せんとするときの巧みな大嘘。わめこうとわめくまいと、抜歯鉗子でうまくはさめばたちまち歯を抜く
歯抜き屋が非凡の腕を世にひけらかさんと、墓地で集めた抜いた歯の長い首飾り。とまれ国王認可証、加うに軟膏、抜歯器具、これぞ、歯抜き屋誇示するあまたの権威

「街頭での歯抜き屋の風景」



図12-70
一本の歯を抜かれている患者の風景（様子）《古いオランダ語》
1700年頃Catsにより出版されたVan de Venneによる銅板エッチングではないか オランダ
7.0×8.5cm
帽子に鳥の羽を飾り、机の上には許可証が置いてある。香具師風の歯抜き屋である。患者の女性は痛そうに手を上げている。地べたには医療道具や抜歯鉗子が置いてある

「歯科医」

図12-71
罪は苦しみなしには去りはしない
アムステルダムにあるKaper Luyken (1670～1710年) の油絵を元にしてWeigelが作った銅版画である。1699年作。ドイツ語の教本から切り取ったもの ドイツ
13×8cm
部屋の中は清潔で、ガウンを着ていて正統派の歯科外科医であろう。助手を二人つけ、一人は患者の手を支えている。絵の下段にある古いドイツ語の詩は「AbrahamのSanta claraの詩」である
悪しき欲望は歯のように
血は根にくっついており
心の中に痛みをもたらす
それを追い出せ、さもないと苦痛は増してしまう。
情欲は押さえられねばならない、
かくして平和と安らぎが心の中に宿るのだ
(むし歯を罪＝悪しき欲望になぞらえて、それを取り出す事が、安らぎを得る道だと言っているのであろう。)



Die böse Lust hängt wie ein Zahn
sich an den Ader, nur kein
und machet im Gewisse Schmerzen.
Heraus mit ihr, sonst wächst die Pein.
Das Fleisch muß uns gefressigt sein,
so wohnt Fried und Ruh im Herstein.